

「独覚」ということ

おおた ひろじ
太田 宏次

中部電力株式会社 取締役会長／元電気学会会長



仏教に、「独覚」という言葉がある。

釈迦族の王家に生まれたお釈迦様は、生・老・病・死という現世の悩みからの救いを求めて出家し、厳しい苦行などを経て、菩提樹の下で静かに悟りを開かれたことはよく知られている。さて、世俗のわざらいを離れ、一人悟りを得たお釈迦様が次に悩まれたのは、この自分が得た悟りを人々に説き、世に広げていくべきかどうか、ということであったという。既に悟りを得たお釈迦様は、自分自身、心の安寧を得たわけであるから、何を煩うこともなく、安らかな人生を送ることができる。一方、もし、この教えを広めていくとすれば、他の宗教との衝突をはじめ、多くの苦難が待ちかまえていることは明らかである。仏典には、こうしたお釈迦様の人間臭い悩みが生き生きと描かれている。苦悩するお釈迦様の前に梵天が現れ、「池に咲く蓮に背丈の高いものや低いものがあるように、人にも様々な理解力の人がいるから、その人たちに応じて説法して欲しい」と懇願し、お釈迦様は伝道の旅に出る決意をされたという。

仏教では、自分一人で真理を悟り、それを人に説かない者を、「独覚」と称している。ちなみに、「仏陀」とは、「目覚めた」、「悟った」という意味であり、必ずしも仏教の開祖であるお釈迦様を指すとは限らない。お釈迦様の偉大さは、「独覚」に陥ることなく、困難な布教の道を敢えて選ばれたところにある。今日、豊かな仏教の教えに触れる事のできる私達は、このことに感謝しなくてはならないだろう。

さて、悩み多き衆生の私が、お釈迦様を引き合いに出すのは、恐れ多いこととは百も承知しているが、この「独覚」の話は、電力自由化論議にも一脈通じるところがあると思う。

本誌の読者の方々は、電力系統技術について、該博な知識をお持ちに違いない。ところが、電力自由化論議においては、「競争を活性化するため、系統ネットワークを分離して、独立した機関に運用させるべき」といった議論が大手を振ってまかり通っている。少しでも電力系統技術を学んだ者であれば、発電から送電、配電までが有機的に結合し、一体となって、瞬時瞬時に変化する電力需要に対応し

ていることを十二分に理解しているはずである。経済学者のなかには、経済理論に無理矢理現実を合わせようとするかのような主張をされる方もいらっしゃるが、電気の発電・流通・消費という一連のプロセスは物理法則に従って運営しなくては機能しない。たとえば、電圧調整一つとっても、変電所側で行う場合もあれば、発電所側で力率を変更することで対応する場合もあり、それぞれの設備が、お互いに協調・調整しつつ、全体として、電気の安定供給が実現されているわけである。

しかし、電気の流れは目に見えないし、なかなか実体として感得し難い面がある。このため、私ども電力の技術者には明がなこうした基本的な事柄が、なかなか一般の方々にご理解いただけない、ということも事実である。だが、自分たちだけが理解し、満足しているのでは、いわば「独覚」にすぎない。多少の困難があろうとも、電力技術の本質的な部分を一般の方々に分かりやすく説明し、ご理解いただくように努めていくことも、私ども専門家の大切な努めである。専門家たる者には、そうした「ノブリス・オブリージュ（高貴な義務）」があるのではないだろうか。

私は、電力自由化あるいは、関連する電力系統技術について、時間の許す限り、出かけて行って、お話をさせていただこうとしている。お相手は、公正取引委員会の委員の先生方といったお堅い面々から、地元の主婦グループまでまちまちで、話す内容も先方に合わせ硬軟取り混ぜ、ということになる。説明する以上は、極力専門用語を避け、分かり易い表現をあれこれ工夫する。「電力系統」というのは、人間の神経のようなもので、これをバラバラにしてしまったら、ロボットのようなギクシャクした動きしかできなくなってしまう…」といった具合である。話を聞かれた方々から、「太田さんの話は面白くて分かりやすい」、「電気が身近に感じられるようになった」と言っていただけると、ホッと胸をなで下ろす次第である。

本誌の読書の皆さんにも、専門家として大いに自己研鑽していただくとともに、ノブリス・オブリージュの氣概を持って、是非、電気技術の一般社会への普及と理解獲得にご尽力いただこう、お願い申し上げたい。